

KALS NEWSLETTER 54

2016年12月
九州アメリカ文学会
事務局 佐賀大学全学教育機構内
佐賀市本庄町1
〒840-8502

マドリードの白い光

高野泰志（九州大学）

メトロの階段を登った途端、もう夜だというのにフライパンの底にいるのかと錯覚するような猛烈な熱気にくるまれた。数日前まで滞在していたパンプローナはむしろ肌寒いくらいだったのに。

ちょうど『日はまた昇る』の主人公たちの足跡を追って、パリから始めた旅は、終着点のマドリードに到達していた。ここで調べたかったのは、ヒロインのブレットが闘牛士に捨てられ、取り残されるホテル・モンタナからパラス・ホテルのバー、そして言わずと知れた名店ボティンまでの足取りである。作品ではわずか6ページほどだろうか。

翌日、マドリードの北、グランビアの近くにあるホテルを出て、ホテル・モンタナを目指す。ホテル・モンタナは二流、三流の安宿として描かれており、特にモデルがあったわけではない。しかし作中の地名を地図で追うと、おおよその場所が特定できるはずである。ジェイクの乗ったタクシーはプエルト・デル・ソル（太陽の門という意味の広場）を通り過ぎ、サン・ヘロニモ通りに入ったところで止まる。サン・ヘロニモ通りに向かうと、スペインらしいゴシック様式の巨大なビルが隙間もなく並んでいるが、そこには確かに安っぽいホテルがいくつか看板を出している。

「店はみな、日よけを下ろして熱を締め出そうとしていた。通りの日の当たる側の窓は錠戸が降りている。タクシーが縁石につけて停まった。2階にホテル・モンタナの看板が見える」マドリードの熱気が伝わってくる描写だが、現在通り沿いにはこの暑さをもとめせずに、サングラスや観光客用の土産を路上で売り歩く商人がひしめいている。風呂敷に商品を固定して、風呂敷の四隅に通した紐を片手で握りしめているのは、おそらくそういう商売が違法であり、取り締まりがあると紐を引っ張るだけですべての商品を持って逃亡できるからだだろう。

行ってみてわかったが、それほど長くないサン・ヘロニモ通りでホテルなどの商業施設が入っているのは全長の半分だけであり、ホテル・モンタナがあるとされている場所は2ブロックほどに限定される。ジェイクがタクシーを降りたのはおおよそこのあたりだろうか

と想像を巡らせながら、次の目的地のパラス・ホテルに向かう。ジェイクとブレットはタクシーで向かうのだが、サン・ヘロニモ通りの反対の端に位置している。歩いて5分もかからないだろう。現在はウェスティン・パラスとなっているが、建物は当時のままである。

このあたりは少し道も広く、日を遮る建物がないために、まともに太陽の光があたり、あらゆるものを白く染め上げている。湿気がないために、建物の影を出るとまるで叩きつけるかのような鋭い日光が肌を焼くのを感じる。パリでブレットはジェイクに、「道を渡るのにも歩こうとしない」と揶揄されるが、マドリードのこの熱気では歩きたくもないだろう。ただ日陰に入ると一気に涼しくなるのが心地よい。

ヘミングウェイはマドリードではパラス・ホテルを頻繁に利用していた。コルテス広場を渡ったところにヘミングウェイのお気に入りのプラド美術館があり、そこへの行き帰りに便利だったのだ。早速ホテルに入り、奥まったところにあるバーに向かう。作品ではジェイクとブレットは3杯ずつマティーニを飲む。当時と現在とでどれほど物価の差があるのかわからないが、マティーニは1杯が並の食堂で十分食事が取れくらいの値段である。だがそこで飲んだマティーニはたしかに絶品だった。ジェイクは「オリーブを入れてくれ」とバーテンに注文をつけるが、私の頼んだマティーニには最初からオリーブが入っていた。

ブレットはカクテルを楽しみながらも、すぐに別れたばかりのペドロ・ロメロのことに話を戻してしまう。「その話はしないんじゃないのか?」「どうしようもないのよ」「大切なことは話してしまうと失くしてしまうものだ」「肝心のところは話してないもの」これはパリの部屋で眠れない夜を過ごすジェイクの描写の反復になっている。ジェイクは他のことを考えようとしながら、すぐに別れたばかりのブレットのことや自分の失われた性器のことにどうしても思いを巡らせてしまう。ふたりの関係はどうにもならないにも関わらず。

ジェイクはその後、バーを出てタクシーでボティンに向かう。ボティンは18世紀から続くスペイン最古のレストラン（スペイン人は世界最古のレストランと呼ぶ）であり、ヨーロッパでもっとも有名なレストランのひとつであろう。予約をしていなかったものの、少し早目の時間であったせいか、幸い席は空いていた。ジェイクらが食事をするのは2階であるが、当時ボティンの2階で食事ができたのはオーナーの知人に限られており、ヘミングウェイは特別に計らってもらっていつも2階で食事をしてきたようである。現在では2階は特別料金が必要となっており、料金さえ支払えば誰でも食事ができる。

「わたしたちはボティンの2階で昼食をとった。世界で最高のレストランのひとつである。わたしたちは子豚のローストとリオッハ・アルタを頼んだ」この「子豚のロースト」は、実際にヘミングウェイのお気に入りであり、ボティンではいつもこれを注文していたようである。現在でももっとも人気のあるメニューであり、もちろんわたしもこれを注文する。4種類ほどの前菜を食べ、リオッハ・アルタを飲みながら子豚を待つ。やがてテーブルの横にウェイターが大きな皿に乗せた子豚を持ってきて、その場で切り分け、サーブしてくれる。スペインの食事は非常に量が多いのはわかっていたつもりだが、それにしてもかなりの量である。ジェイクらは「たっぷりと食事を食べ」3本ものワインを飲んだと描かれているが、わたしにはとてもそれだけの量は入らない。

「酔っ払わないで、ジェイク」ブレットが言った。「あなたにはそんな必要ないんだから」「なんで分かるんだ?」「やめて」彼女は言った。「あなたは大丈夫よ」「酔っばらおうとし

てるんじゃない」わたしは言った。「ちょっとワインを飲んでるだけだ。ワインが好きなんだ」「酔っ払わないで」彼女は言った。「ねえジェイク、酔っ払わないで」

ジェイクの語りでは、ロメロのことが頭に取り付いて離れず、苦しんでいるように描かれているのはブレットだったが、まるでヤケになったように食事を頬張り、ワインを流し込む姿からは、ジェイクもまた苦しんでいることが徐々に明らかになってくる。まるで喪失感を埋めようとするかのように食べ、飲み続けるジェイクであるが、いくら流し込んでも満たされることはない。むしろ満腹感が増せば増すほど、喪失感が募るという皮肉な状況が描かれている。ポティンはそのどうにもならないふたりの関係が、相変わらずどうにもならないままもとの袋小路に戻ってくることを浮かび上がらせる転換点に位置するのである。

ポティンを出たジェイクとブレットは近くの広場でタクシーに乗り、グランビアに向かう。その車中が物語の終わりになっている。「ひどく暑く、明るく、家並みは目に刺さるような白さだった」同じような炎天下の中、満腹で少し重い腹を抱え、やっと作品を追う旅も終わったかと思いながらマドリードの街を歩いていると、語られなかった「肝心のところ」を少しだけ覗き込んだような気がしてくる。とはいえ舞台を歩いたに過ぎず、それはおそらく思い込みでしかないのだろうが、そう考えるのも愉快ではないだろうか。

地区便り

<熊本地区>

熊本大学 池田志郎

前回報告以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をご報告いたします。熊本地震の影響でしばらく活動ができませんでしたが、日常を取り戻すためにもと、9月に活動を再開しました。自宅の全壊など被害が大きい会員もいらっしゃいますが、文学の世界に浸ることで、少しばかりの時間でも辛い現実を忘れることで、生活再建の活力になればと願っています。

○133回（2016年9月17日）熊本大学にて

題目： ラフカディオ・ハーン：五高着任後の熊本発第一信書簡（Nov.20, '91）、及びその後の彼の熊本観を中心に

発表者： 角田 俊治（熊本大学非常勤講師）

司会者： 池田 志郎（熊本大学）

*ハーンの熊本時代を中心として、移り変わる熊本と日本の姿についての発表でした。ハーンの熊本嫌いの理由、当時の写真などを利用しての歴史上のエピソードについての話題、夏目漱石とのかかわりなど、多岐にわたりました。参加者からの意見も多く出て、